

『親鸞聖人 御絵伝』「絵解」資料解題

沙 加 戸 弘

凡 例

一、当解題は、『親鸞聖人 御絵伝』「絵解」の展開を資料によって跡付ける目的をもって作成したものである。

一、『親鸞聖人 御絵伝』「絵解」の、真宗教団における一般的意識の展開、という視点から、資料は刊行されたものに限った。

一、当解題では、期を画す資料として、次の四部をとりあげた。

一 『親鸞聖人 御伝絵解』 正徳六年刊

二 『御絵伝教授鈔』 安永二年、安永四年刊

三 『見真大師 御絵伝詳指録』 明治二十年刊

四 『御伝鈔法話』 明治二十四年刊

一、特に注記したものの他は架蔵本である。

一 『親鸞聖人 御伝絵解』

一、名称 『親鸞聖人 御伝絵解』（シンランショウニンゴデンエゲ）。
一、法量 八卷八冊。

卷之一 一冊、目録二丁、本文十八丁。

卷之二 一冊、目録一丁、本文十九丁半。

卷之三 一冊、目録一丁、本文二十五丁半。

卷之四 一冊、目録一丁、本文二十丁。

卷之五 一冊、目録二丁、本文十八丁。

卷之六 一冊、目録一丁、本文十二丁半。

卷之七 一冊、目録一丁、本文十六丁。

卷之八 一冊、目録一丁、本文十五丁。

縦二十五・五糎、横十八・一糎（卷之一）。

袋綴、明朝。

原装。薄朽葉色無地。

一、表紙 原題簽。左肩。縦十六・八糎、横四・一糎。子持杵。上部に円囲みで「親鸞聖人」と二行書。中央

に「御傳繪解」とあつて下部に卷数。

一、本文 漢字片仮名。振仮名有。

一、半丁行数 九行。

一、匡	郭	四周単辺。縦二十・二糧、横十五・一糧（卷之一、第二丁、表）。
一、内	題	「御傳繪解 卷之一」（至卷之八）。別に目録題がある。
一、丁	付	版心。
		卷之一 目録一：一―十之五―十六：二十三。
		卷之二 目録一：九―十ノ五―十六：二十五。
		卷之三 目録一：九―十ノ十五―十六：三十一冬。
		卷之四 目録一：九―十ノ十五―十六：二十五終。
		卷之五 目録一―目録二：一：九―十之五―十六：二十三終。
		卷之六 目録一：九―十ノ五―十六：十八終。
		卷之七 目録一：九―十ノ五―十六―十七ノ廿一―二十二：二十五冬。
		卷之八 目録一：九―十之五―十六：二十終―廿一。
一、版	心	白口、上魚尾。魚尾は黒魚尾で殆どが花口魚尾である。上から順に、魚尾、版心書名（「絵解」、巻数（「一」：「八」、円印、丁付。
一、序	文	なし。
一、奥	書	卷之八、十五丁裏、本文末に、 時正徳二壬辰一陽来復日 信州松本隠遁七十野僧謹誌 とある。
一、刊	記	卷之八、十六丁表に、

御傳繪解卷之八終

正徳六丙申年三月吉日

親鸞聖人行狀記全部十卷近日出来仕候

とあって、その後に木記で、

皇都書林

と上部に二行書、下部に、

佛光寺通堀川西へ入町 鎰屋井上七郎兵衛

醒井通五条上ル町 金屋小佐治半七郎

油小路通五条下ル二軒目 白粉屋藤江武兵衛

とある。

一、著 者 不詳。

一、刊 行 正徳六年三月

本書は、正徳六年三月（一七一六）に刊行されたもので、『親鸞聖人 後繪傳』繪解台本の刊行本の嚆矢と考えられる一部である。

本書名を、「シンランショウニン ゴデンエゲ」と訓じたは、書中どこにも「エトキ」あるいは「トク」という語がなく、かつ巻二の初め、御俗姓の注釈から絵相の解説に移る条に、

○上来御俗姓 又御発心ノオモムキアラ／＼述シオハンヌ 已下ハ画図ノ次第ヲ大概申シ解スベシ

とあって「解」の字に「ゲ」と振仮名があることと、版心書名が「絵解」とあって『御傳繪』あるいは『傳繪』が一語

であるという意識が見えにくいことによる。

本書は、『御傳鈔』本文の注解を中軸に据え、親鸞の一代記を述することを主とし、その親鸞の一代記に『親鸞聖人 御傳』を相当させることを以て従とする立場をとる。

『親鸞聖人 御傳』『絵解』の展開の段階で言えば、絵の説明、すなわち「絵説（エセツ）の書」ということになる。本書が刊行された正徳期に、広く『親鸞聖人 御傳』の絵相に対する説明が行われており、かつその営為を「絵説（エセツ）」と呼びならわしていたことは、本書第五巻の第十六丁裏、『親鸞聖人 御傳』の三幅第六図を解する文に、

㊦ コレナルハ筑波山ナリ

絵ノウヘノ右ノ角ニフタツノ峯ヲカキタルハコレ筑波山ナリ コノフタツノミネヲ西ヲ男体トイヒ東ヲ女体トイフ イヅレモ権現ノヤシロアリ シカルニ当世ノ絵説ニ 禅坊ノウシロノヤマヲツクバヤマトイフ。コレオホキナルアヤマリナリ 禅坊ノウシロノヤマハ稲田山ナリ コノ稲田山ノミナミノソハニ禅坊ヲタテ、マシ／＼ケリイマノ西念寺ノ地コレナリ

* 原資料には片仮名で振仮名が施してあるが、今これを省略した。「絵説」には「エセチ」と振仮名がある。

とあるによって知れる。これによって、多くの「絵説」が、統一されることなく、自然発生的におこなわれていたことも同時に推測できよう。

二 『御繪傳教授鈔』

- | | |
|-----|--|
| 一、名 | 『御繪傳教授鈔』（「ゴエデンキョウジュショウ」）。 |
| 一、法 | 前篇五卷五冊。後篇五卷一冊。大谷大学図書館所蔵本は前篇五卷五冊のみ。 |
| 量 | 龍谷大学図書館写字台文庫蔵本は前篇五卷一冊、後篇五卷一冊。以下、後篇五卷については龍谷大 |

学図書館写字台文庫所蔵本による。

前篇

卷一 序二丁、目録一丁、本文十五丁半。

卷二 本文十四丁半。

卷三 本文十五丁。

卷四 本文十四丁。

卷五 本文十六丁半。

後篇

卷六 目録一丁、本文十五丁。

卷七 本文十五丁半。

卷八 本文十七丁半。

卷九 本文十八丁半。

卷十 本文十六丁。

縦二十五・五糎、横十八・四糎（卷一）。

袋綴、明朝。

原装、縹色無地（卷二）。

原題簽。左肩。縦十七・五糎、横三・七糎。单郭。上半分中央に「御繪傳教授鈔」と大書し、その

下やゝ右に寄せて「前篇」と記し、下部に卷数を書す。

漢字片仮名、振仮名有。

一、寸 法
一、装 訂
一、表 紙
一、題 簽
一、本 文

一、版心	一、半丁行数 十行。
	一、匡郭 四周单边。縦二十一・一糎、横十五・四糎（巻一、第一丁表）。
	一、内題 「御繪傳教授鈔 巻一」（至 巻十）。
	別に目録題が前後篇の初巻、巻一と巻六にある。目録では「第一巻…第十巻」の表示が使用されている。
一、丁付	版心。
	前篇
	巻一 ナシ—ナシ—ナシ—一…十六。
	巻二 一…十五。
	巻三 一…十五。
	巻四 一…十四。
	巻五 一…十七。
	後篇
	巻六 目—巻—二…十五。
	巻七 巻—二…十六。
	巻八 一…十八。
	巻九 一…十九。
	巻十 一…十六。
	白口。上魚尾は略型白魚尾。下魚尾は横二重線の略型。上から順に、上魚尾、版心書名（「教授

一、序文

鈔し、巻数（自「巻一」至「巻十」、下魚尾、丁付。
後篇巻六の第四丁から第十一丁までと、巻七の第一丁から第六丁、同第八丁から巻九の第八丁まで、
巻九の第十三丁から巻十の第十六丁まで、丁付の下部に縦二纏、横一纏の空白の枠がある。
二丁。

明和壬辰春三月望

栗津義圭題

ナシ。

一、奥書
一、刊記

巻五、十七丁表。

上部に、

安永二癸巳歳

正月吉旦

皇都書林

と三行に書し、下部に、

寺町通松原ル町

菊屋 喜兵衛

下数珠屋町東洞院西エ入町

丁字屋 正助

寺町通松原上ル町

菊屋 七郎兵衛

寺町通五条上ル町

藤屋 藤七

五条通富小路西エ入町

錢屋 新助

五条通高倉東エ入町

北村 四郎兵衛

とある。

卷十、十六丁表。

上部に、

安永四乙未歳

正月吉旦

皇都書館

と三行に書し、下部に、

北村 四郎兵衛

丁字屋 正 助

藤屋 藤 七

銭屋 新 助

菊屋 七郎兵衛

菊屋 喜兵衛

とある。

越中 明光寺靈譚

前篇五卷五冊、安永二年正月。

後篇 安永四年正月。

後篇は、当初五卷五冊であったものか、当初より五卷一冊であったものか、不明。

大谷大学図書館（前篇、五卷五冊）。

龍谷大学図書館写字台文庫（前後二篇、十卷、二冊）。

本書は、書誌に記したように、前篇五卷五冊が安永二年正月、後篇五卷が安永四年正月の刊行である。

本書の執筆は、部分によってかなり遡ると思われるが、本稿は「刊行」という点に主眼をおいての解題である故、今その問題にはふれない。

本書は実質上、絵相を教義として読み取り『親鸞聖人 御絵伝』を勸化の具とする「絵解（エトキ）」という営為の成立を示す、最初の刊行台本である。

言い換えれば、「絵解」は本書の刊行時に成立していた、もしくは「絵解」は本書の刊行によって一般化した、ということが確認できる一本である、ということになる。

三 『御絵伝詳指録』

一、名 称 『見真大師 御絵伝詳指録』（ケンシンダイシ ゴエデンショウシロク）。

一、法 量 五卷一冊。

卷一 本文四十丁半。

卷二 本文四十二丁半。

卷三 本文四十八丁半。

卷四 本文四十三丁。

卷五 本文三十五丁半。

一、寸 法 縦十七・一糎、横十一・八糎。

一、装訂	小本。袋綴、明朝。
一、表紙	原装。朱色、囲み八藤に花菱紋と卍つなぎとの空押。
一、題簽	原題簽。左肩。縦十一・〇糎、横二・二糎。子持枠。上部に円囲みで「見真大師」と二行に書し、中央に「御繪傳詳指録」、下部に「全」。
一、本文	漢字片仮名。振仮名有。
一、半丁行数	十行。
一、匡郭	四周单边。縦十四・三糎、横十・〇糎（卷一、第一丁表）。
一、内題	「見真大師 御繪傳詳指録」（「見真大師」は角書）。
一、丁付	版心。
	卷一 一：四十一。
	卷二 一：四十三。
	卷三 一：四十九。
	卷四 一：四十三。
	卷五 一：三十六。
一、版心	白口、上魚尾は黒魚尾、下魚尾は横二重線の略型。上から順に、上魚尾、版心書名（「御繪傳詳指録」、卷数（自「卷一」至「卷五」、下魚尾、丁付。
一、序文	なし。

表紙見返しに巻首木記がある。縦割三枠で、中央枠に書名（上部に円囲みで「見真大師」と二行書、その下に「御繪傳詳指録」、左枠に「京都書林 西村九郎右衛門版」とある。右枠に四行、

該書ハ四幅御繪傳中一々図下ニツキ叮嚀親切ニ指／図セシ古今ニ希ナル珍書ナレハ説教者ハ勿論
一流ノ門／徒タルモノ座右恒ニ欠クベカラサル新著ナレハ陸續購読／アラン事ヲ乞フ
とある。

一、刊 記

裏表紙見返しに

明治十九年七月十日出版御届

同 二十年三月廿五时刻成

編輯者 大河内了知

出版人 西村九郎右衛門

とある。

一、編 者

裏表紙見返し of 編輯者の条に

大河内了知

三河国幡豆郡田貫村三十八番地

とある。

一、刊 年

明治二十年三月

一、所 蔵

大谷大学図書館

本書は、明治二十年三月に西村護法館より刊行された、『親鸞聖人 御絵伝』の絵解台本である。

幕末から明治にかけて、絵解説教という新しい方法が、説教技術の進展と相俟って真宗門徒の中で広く歓迎されたことを示す好資料である。

内容を閲するに、絵解の方法から言っても、またその実用性から言っても、はたまたそのわかりやすさから考えても、『親鸞聖人 御繪傳』絵解台本中の白眉と言ってよい。

状況について付言すれば、明治十年五月十日、東本願寺は絵解禁止令を出し、権中教正石川舜台の名で「配紙」によって末寺に達した。続いて明治十三年六月、西本願寺も同様の禁令を出し、一等執行近松撰真名で「本山達書」によって末寺に触れた。

この背景には、明治五年四月二十八日全国の神官・僧侶に対して明治政府の行った「三條教則」（「敬神愛國・天理人道・皇上奉戴」、当時これを「三條」と略称した）の交付や大教院設置に見られるような、明治政府の仏教教団に対する管理強化と、それに対応して組織防衛に腐心する真宗教団の駆引があろうが、結果として絵解は明治初期の真宗教団において、放置すれば相手につけ込まれる弱点、と認識されたことになる。「三條」交付の後、明治七年五月真宗四派（東・西・専・錦）は「説教規則」を制定して末寺に達し、さらに明治八年九月真宗四派は「改正説教規則」を定めて末寺に触れた。その第三条に、

或ハ時勢ヲ談スルモ言鄙俚ニ亘リ態俳優ニ類スル者ノ如キハ啻ニ感化ノ用ヲ失フノミナラス最モ教ヲ汚辱スルノ甚シキ者ナリ

とある。絵解は「言鄙俚ニ亘リ態俳優ニ類スル者」と見なされたことになる。

当然の事ながら、この禁令の出た明治十年代が真宗の布教史の中で絵解が最も隆盛であった時代、ということになり、その最高潮に達した『親鸞聖人 御繪傳』絵解の技術と実用性を形にとどめたのが本書、ということになる。

四 『御傳鈔法話』

一、名 称 『御傳鈔法話』（「ゴデンショウホウワ」）。

一、法 量

三卷三冊。

上一冊、本文四十丁。

中一冊、本文四十丁。

下一冊、本文四十三丁。

縦十六・九糎、横十二・〇糎。

版本、小本。袋綴、明朝。

原装。朱色。囲み八藤に花菱紋と卅つなぎとの空押。

一、表 紙

原題簽。左肩。縦十一・〇糎、横二・六糎（上）。子持梓。中央に「御傳鈔法話」とあって、下部に

一、題 簽

「上（中・下）」の卷名。

一、本 文

漢字片仮名。振仮名有。

一、半丁行数

十行。

一、匡 郭

四周单边。縦十四・四糎、横十・〇糎（上、第一丁表）。

一、内 題

『御傳鈔法話 卷之上』（『同 卷之中』、『同 卷之下』）。

上の内題左下に

渥美契華師説

藤谷恵燈編輯

とある。

一、丁 付

版心。

上一：四十。

中 一：四十。

下 一：四十三。

一、版 心

白口。上魚尾は黒魚尾、下魚尾は横二重線の略型。

上から順に、上魚尾、版心書名（「御傳鈔法話」、巻名（自「上」至「下」、丁付、下魚尾、版心蔵版記（「護法館蔵」）。

一、序 文

なし。

上の表紙見返しに巻首木記がある。縦割三枠で、中央枠に書名（「御傳鈔法話」、右枠に二行、

渥美契華師説

藤谷恵燈編輯

とある。左枠には、上部に二行、

明治廿四年

四月発行

下部に

護法館蔵版

とある。

一、刊 記

下の裏表紙見返しに、

明治廿四年四月廿日印刷

同 年同月同日出版

印刷兼発行者

京都市下京区下数珠屋町

東洞院西エ入橘町八番戸

西村九郎右衛門

編輯者

滋賀県近江国伊香郡

木ノ本村妙楽寺副住職

藤谷恵燈

とある。

一、著者編者
上の巻首木記、同内題下の記、並びに刊記によれば、渥美契華の説くところ、藤谷恵燈が編輯したものである。

一、刊 行
明治二十四年四月

本書は、書誌に記したように、明治二十四年四月、前項『見真大師 御絵傳詳指録』と同じく、西村護法館の刊行である。

丁数は、前項『見真大師御繪傳詳指録』のほぼ半分（『見真大師御繪傳詳指録』二百七十五丁半に対して『御傳鈔法話』百三十三丁）と少なく、『親鸞聖人 御繪傳』の絵相そのものについての解説も非常に少なくなっている。

そのかわりに本書は、登場人物の氏素性や事物の故事来歴について述べるところすこぶる厚く、また書中の譬喩は庶民生活から浄瑠璃・歌舞伎に及んで、娯楽性が極めて高い。「絵解」と言うよりは、『親鸞聖人 御繪傳』を奉懸しての説教、という感が強く、『繪傳』を離れて滔々と弁じて倦むことがない。

『親鸞聖人 御繪傳』の「絵解」が大きくその方向を転換する、あるいは急激に衰退に向かう、その時期を如実に示す資料である。

今一点、本書の書名に触れておきたい。本書は『御傳鈔法話』とある。前条に記したような、内容の些かの偏りはあるにしても、本書が『親鸞聖人 御繪傳』の絵解台本の秀作であることには一点の疑いもない。この四年前に刊行された前項『見真大師 御繪傳詳指録』を知らなければ、絵解台本の最高作と考えることも可能である。にもかかわらず、本書名は『御傳鈔法話』となっている。「絵」も「解」も「指」も「羽」もない。

この書名と言い、内容と言い、本願寺の禁令漸く出版界に及び、絵解の衰退をもたらしたことを如実に物語る資料であると言えよう。

振り返ってみれば、「絵説」の濫觴期、『親鸞聖人 御繪傳』を書名に使用しながら、内容は『御傳鈔』に終始する、という例が一再ならずあったが、絵解の終焉期にはそれと全く逆の現象がおこったことになる。